



笑顔を引き出す看護

〈神奈川県〉堀井 緑 30歳
ほりい みどり

私が小学生の時に、母は脳腫瘍で入院を繰り返すようになった。仕事と家事を両立しおしゃべりで明るい母も、病気が進行するとあまり笑顔を見せなくなっていた。一日中病室でふさぎこんでいることが多くなり、面会時には「ごめんね。お母さんこんなんで」と家族に嘆くようになった。その言葉は自尊心を失っているようで、私は母に会うのがつらくなってしまい、どう接したらいいのか分からず、母との間に距離ができてしまっていた。

週末、面会に行っても元気がなかった母を励まそうと病室で髪を切ってあげることにした。忙しそうな看護師さんにはそのことは言わず、父と姉と兄、家族だけで母の髪を切ることにした。おしゃれが大好きだった母は髪を切ると「短くなっただかな」とうれしそうに尋ねたが、鏡を用意していなかった。

「今、鏡はないから、後で洗面所に行こうか」。母にそう伝えしばらくすると、カーテンの隙間から鏡とくしが出てきた。誰だろう。そう思いカーテンを開けると担当の看護師さんだった。「これ、使ってください。Aさんとてもすすてきですよ。娘さんが髪を切ろうって計画したのかな。Aさんを喜ばせたかったんですね。大成功だね」と言って、母と私の背中をそっと撫でてくれ、鏡とくしを手渡してくれた。

くしで髪を整え、鏡に映った姿を見て、母は「ありがとう。大成功だよ」と久しぶりに満面の笑顔を見せてくれた。久しぶりに見た、家族が大好きな母の明るい笑顔だった。忙しいのに家族のやりとりを気に掛けてくれていた。私が母に掛けたかった言葉を代弁してくれたことで、母との距離を縮めることができた。母と私たち家族への思いやりと気遣いの言葉

に、感謝の気持ちで涙が止まらなかった。母のために何かしてあげられたのかと後悔する日もあるが、看護師さんが引き出してくれたあの日の母の笑顔と言葉を大切にしている。ふさぎこんでいた母の笑顔を引き出してくれた看護師さんの細やかな気遣いと、母と私を尊重してくれた言葉掛けが今でも忘れられない。私はあの日の看護師さんに憧れて看護師になり、こととして10年目。看護師になってから、いつも、いつも胸に決めていることがある。どんなに忙しくても、まっすぐ患者さんと家族を見つめよう。どんな時も患者さんと患者さんを支える家族の笑顔を引き出したい。私に教えてくれたあの日の看護を思い出しながら毎日働いている。